

## 【書評】

### Giandomenica Becchio and Giovanni Leghissa, *The Origins of Neoliberalism: Insights from Economics and Philosophy*

London and New York: Routledge, 2017, vii + 210 pp.

本書の著者ジャンドメニカ・ベッキオーとジョバンニ・レジッサはそれぞれトリノ大学の経済学と哲学の研究者である。異分野の2人による共著という形で本書が刊行されたことからわかるように、ここでは新自由主義(neoliberalism)という主題を扱いながらも経済学と哲学両方の視点に立ち、その起源と今日までの発展過程が幅広く論じられる。

今日経済政策やイデオロギーとして理解される新自由主義であるが、本書ではフランスの哲学者ミシェル・フーコーが1978-79年にコレージュ・ド・フランスで行った「統治性」分析を手掛かりに検討される。

フーコーの分析によると、時代に応じた統治の合理性は、具体的な統治技術、科学的言説、司法体系、個人と集団に働きかける規範などが織り成されることで実践的に機能する。例えば経済学は古典的自由主義の時代には、個人が享受する自由の生産に寄与するために、国家がその活動を抑制するように促す言説によって統治の合理性を言説的側面から支えた。このような経済言説の役割は新自由主義においても共通して見られる。いずれの統治技法も経済学が対象とする領域を拡大し、その過程で言説によって支えられる統治技法の「真理」を発見し、それに従って行為遂行者が行動するように導く。とりわけ市場は統治技法の「真理陳述の場」として定義された。

「真理」の発見に古典的自由主義と新自由主義の連続性を見ながらも、フーコーおよび本書で強調されるのは、2つの自由主義の差異とその乖離である。本書の著者たちは新自

由主義を検討する際、古典的自由主義やポリティカル・エコノミーの経済的概念と比較し、その連続性や乖離を語るのではなく、特定の統治行為を可能にした経済学の「科学的」役割の変遷(系譜学)からその展開をたどることになる。

第2章では古典的自由主義から新自由主義の移行を軸に、さらにポリティカル・エコノミーからエコノミクスへの展開、あるいは古典派経済学から新古典派経済学への展開が概観される。また20世紀のオーストリア学派とシカゴ学派の差異、さらにシカゴ学派(フリードマン)における「新自由主義」の完成について分析が行われる。

ポリティカル・エコノミーが古典的自由主義に基づいていたように、新古典派経済学は新自由主義と深く関わっている。どちらの場合も経済理論における「個人についての考え方」が問題となる。ただしポリティカル・エコノミーは市場や社会で活動する際の個人の自由を考慮するが、そこでは経済と政治の領域が互いに尊重されながら切り離されている。他方で新古典派経済学において、個人は「合理的に効用を最大化する行為遂行者」として理解され、その原理が提供される新自由主義ではこの経済合理性モデルが社会のあらゆる場面に拡散することで経済と政治の領域は区別されなくなる(「経済帝国主義」)。その点について第3章では新古典派経済学と新自由主義がどのように結びついていったかが合理的選択理論をとおして検討される。その際、著者たちが注意を促すのは合理的選択理

論の他の学問分野への適用である。さらに経済学の科学的役割の比重、個人の行動力学の複雑さの程度、そして社会の自生的秩序と不確実性の有無が検討されることで、オーストリア学派とシカゴ学派の違いが鮮明になる。

新古典派経済学によって合理的選択理論を提供された新自由主義は、個人の合理性概念を通して複雑な現象を分析するために、それを純粋な選択理論へと単純化させた。本書において単純化は1つのキーワードである。この分析はフーコーの手法を用いることで可能になった視点であると同時に、フーコー自身も見落としていた視点である。科学的言説を提供することによって、「経済学は統治技法にその有効性を気づかせるために「真理」の言説をもたらしただけでなく、複雑な社会を単純化する手続きをつくりだした」(64)。単純化は強みであると同時に脆弱さでもある。新自由主義が徹底的に利用したのが経済学の科学的言説としての役割と複雑な現象を単純化する機能であった。

さらに第4章では実際的に新自由主義の考え方が社会に広く行き渡っていく契機を与えるものとして、企業と国家官僚制の果たした役割が強調される。またそれは同時に、すべての生活形態全般が新自由主義的な組織論の言葉によって語られていく過程として捉えられる。

ふたたび古典的自由主義と新自由主義の違いに立ち戻れば、前者における自由は、スコットランド啓蒙に象徴されるように道徳的基礎づけや倫理を伴っていた(オーストリア学派はこの系譜に位置付けられる)。対して新自由主義はその統治技法から倫理的側面を放棄していく一方、効率に基づく経済合理性や新古典派経済学による道具的合理性を取り入れることで、自由の基準を効率に求めた。

新自由主義の統治技法が社会に拡散していく歴史的過程を概観すれば、この傾向が続く

ことは避けられない。しかしその前提に立った上で著者たちは別の展開を模索する。「倫理について熟慮し、政治および社会科学としての経済学という真の姿を復活させる多元的なアプローチへとこの学問を再構成」(194)すること。そのためには経済学を「人文学」(humanities)の領域に位置付けねばならない。

人文学の可能性は、しばしば内的な凝集性と他者の排除をともなう個人的かつ集団的なアイデンティティ概念を解体する点に求められる。人文学がこのようなアイデンティティの登場を生む言説構造分析に傾注してきたのは、民主主義社会を支える寛容さを広めることに貢献できると考えたからであった(ヌスバウム)(166)。

人文学が多様性を持つことの意味を、著者たちは堅固に基礎付けられた倫理ではない、ニーチェ的なニヒリズムに基づいた倫理のあり方で補う。「価値概念の堅固な基礎は必ずしも必要ないと言うことは、要するにさまざまな立場(さまざまな善の概念)が検査され、議論され、相互に比較されたりするやりとりの場が存在すると言うことである」(196)。つまり今日求められている倫理は、根源的な土台に寄りかかった形而上学的な倫理ではない。むしろ硬直した状況に抗うべく、多様な可能性のために場を開いておく実践としての倫理が必要だとされる。

本書は異分野の2人の著者によって著されたことで、新自由主義という主題を経済学史の分析だけに終わらせないというメリットがある。フーコーの系譜学的な手法の利用は、新自由主義の起源と展開を統治的合理性の変遷として描いただけでなく、道徳哲学としての経済学という経済思想史上の観点を押さえながら、再び(そして新たに)開かれた場として経済学と倫理を取り結ぼうとする努力につながっている。

(北田了介：大阪経済大学非常勤)